源氏物語の女性観

重松信弘

一

源氏物語の女性観とは、源氏物語に現われている女性に対する見方であり、それは女性の現実のあり方と、それに対する感想批評とを含む。感想批評は実際のあり方の描写に伴っており、正面から述べることもあれば、軽く所感の形をとることもあり、時には叙述描写の間に、おのずから滲み出ることもある。またそれは女性の心情・行動の表現や、人々の対話や、地の文などによって表わされる。特に雨夜の品定では、談話の形で、多種多様の女性の観察批評がなされていて、女性観が最も多く集中している。その他にもところどころ感想批評が散在するが、それらの批評よりも、女性の心情言動などの描写に、深い女性観が宿されていることが少くない。

女性観に対立するものとして、当然男性観があるが、源氏物語では男性観よりも女性観に、重要な意味がある。このことは、この物語で男と女とのいずれに重きがおかれているかという問題と、関連している。正篇でいえば、源氏が主人公であり、男性中心の物語といえる。しかし「源氏物語の本意は婦人の評論」にあり、「源氏は一篇の主人公なりとはいへ、むしろ夥多の女子を集中する方便に過ぎず」という説(一)もある。源氏を多くの女を集中する方便にすぎないとみるのは、行き過ぎであろうが、女性中心とみたのは注目すべきである。源氏は物語の骨格をなす主人公で、最も重要な人として描かれており、物語のどの女に比べても、勝るとも劣らない意味がある。しかし源氏をめぐる重要な女のすべてを採って、源氏に対立さすと、その比重は必ずしも源氏が重いとはいえない。藤壺・葵上・空蟬・朝顔・六条御息所・夕顔・紫上・末摘花・朧月夜・花散里・明石上・玉鬘・女三宮などを採って、源氏に比べると、その文芸的意義は、女の側が勝っているといえよう。このことは、宇治十帖についてもいえる。薫は主人公とされていても、大君・中君・浮舟の三人を採ると、この三人の方が重い。宣長はこの点に注目して、宇治十帖は八宮の姫達のことを主として書いたものだとしている。(二)要するに、源氏物語は女を描くことを主とした物語である。

この物語では、男と女との描き方が違う。男では一人源氏が、他をはるかに引きはなして、重く取扱われているが、女にはこのような主人公がない。紫上が女主人公のようにも見られているが、それも男における源氏ほど、有力なものではない。前にあげた十余人の女のことを思っても、紫上では、何程もその人達のあり方の意味を表わすことはできず、やはり女性群像の中の一人にすぎない。このような男と女との描き方の違いは、男の境遇・心情が女のそれより

も、単調であることによるであろう。単調であるから、源氏一人でも多くの男の心情を代表し得るが、女は境遇がさまざまであり、心情も複雑・微妙に動くから、女主人公一人を設定したのでは、それを表わすことはできない。例えば、源氏のひたぶるなまたあやにくな恋心は、一筋に強く動くが、これの対象となった藤壺・六条御息所・夕顔・末摘花・朧月夜・紫上などの境遇・心情は、甚だしく違う。即ち男の源氏の心情に比べて、これに対応する女の側の反応は複雑・深切・微妙であり、多くの女を以てしなければ、それを表現することはできない。このことは宇治十帖においてもみられる。薫は物語に登場した時から道心を懐いており、女に恋してもそれを失わないことが特色である。そして心の生長もなく単調であるが、薫に接した大君・中君・浮舟には、それぞれに違った複雑・深切な心情があって、物のあわれを深くしている。要するに、男は境遇・心情も比較的単調であるから、これを表わす人数も少く、女は境遇もさまざまであり、その心情も複雑・深切なものがあるから、人数も男よりも多い。女がこのように描かれているということは、同時に男性観よりも女性観が、複雑・深切であることを意味する。そのため女性観はその内容が豊かであり、文芸的意義も勝っている。源氏物語事典（岡一男著）で、女性観が男性観の三倍以上の分量であるのも、そのことを反面から傍証するものといえるであろう。

すべての女性観の根本には、必ず男との関係が潜在している。日常的なことから、生きて行くことの根本義まで、男との関係を抜きにしては考えられない。この立場から女性観を分析すると、第一男との愛情関係における女のあり方に関するもの、第二家庭人・社会人としてのあり方に関するもの、第三人間としての存在の本質的意義に関するものとすることができる。第一、第二は日常的・形而下的な面であり、第三は本質的・形而上的な面である。またこれは論理的な分析であって、物語の具体的な表現では、いつでもこのように分かれているのではない。またこれは男の立場、女の立場、地の文などで表わされており、男の立場では、他性のこととして観念的になる嫌いもあるが、女としては、自分のこととして、深刻に思うものや、切実な感動を伴うものがある。女性観が表わされる場はさまざまであるが、古来特に雨夜の品定の女性観が注目せられて、今日に及んでいる。それでここでも先ずそれを検討してから、女性観全般の考察に進むこととする。

二

雨夜の品定では、幅広くさまざまな女を語り、かつ批評している。女性観がこれほど多く集中した所は、外にはない。そのため宗祇の帚木別註（雨夜談抄）[三]以来、今日まで注目され、女性観の総評、総収とも考えられた。またこの品定で語られている女性像を、後に出る女に当てることも早くから行われた。帚木別註や細流抄は十数人を当て、岷江入楚・湖月抄・其他これを襲用するものが少くない。（これは一部の類似から、早急に対応さすもので、妥当とも思われないが、それは別として）、このやり方の根底には、品定を物語の総論のようにみる考えがある。しかし品定はこれが行われた場・行った人・物語がこれをここに設定したことの趣意などからみて、よほど制約されていることを思わねばならない。

(1)源氏が十七才の時の五月雨の夜、その物忌に籠った三人の若者

が、物忌の徒然を慰めるため、女の話をしたのである。この場、この人からみて、それは到底物語の女性全般にわたるような、広いまた深い意味を持つ、女性観とはなり得ないはずである。

(2)また物語がここに品定を設定したことの意味も、考えねばならない。女のことを語るのは、物忌の徒然の慰めとして、まだあまり世間を知らない源氏に、いろいろな女のあることを知らすのであるが、源氏はこれで中の品の女のことを知ると共に、大いに興味を起して、これがこの後の女性探訪の手引きとなっている。女の種々相を語り、表面的には尤らしい批評に落付けながら、皮肉にも源氏の恋愛遊戯の導きをしているのは、作者が構えた趣向である。品定にこのような任務が負わされているとすれば、これは源氏の恋愛物語の最初に来ねばならない。またその内容もそれにふさわしいものとなり、その女性観もおのずから限定されるものとなる。

(3)品定は中の品の女の話であるが、この後の物語には藤壺・六条御息所・葵上・女三宮のような上の品の人々も登場して、甚だ重要な役目を演じている。このような上の品の女のことは、品定の話の対象とはなっていない。(最初に僅かに触れているだけで、殊更除外している)。

(4)品定のすぐ後で、源氏が中河の紀伊守邸で会った空蟬も、その時噂された朝顔も、源氏に靡かない。このような気の強い女のことは、品定には出ていない。更に晩年の紫上・宇治の大君・浮舟などのような女も、品定では出る幕がない。特に朝顔や大君のように、始から男の求愛を拒否してかかるような女は、品定では夢想することもできない。

(5)品定がこの男の側からみた女性観であることからも、おのずから限定されるところがある。若い男が恋愛の対象としての女、家庭人としての女を語るもので、女自身の立場、その立場からの物思いなどは、殆ど顧みられていない。六条御息所のような執念、密通に追いやられた女の悩み、男を受入れ得ない苦しい物思いなどには、触れることはできない。女自身が自己の問題として考えるものには、内面的であり、真剣であり、微妙であり、哀切なものもある。

以上のように考えると、品定は物語の女の総評・総収とはいえない。多分に制約された面があるが、それにしても、珍らしくさまざまな女の話が集積せられている。この多種多様な女性を語って、その中に精密な観察と、鋭利で賢明な批評とが、おびただしく凝集されている。時には若者達の女性談にふさわしくないような、まじめで思慮深い意見も述べられている。それは左馬頭が木枯の女の話をした後で「今さりとも七年(ななとせ)あまりの程に、おぼし知り侍りなむ。なにがしが賤しき諫めにて、好きたわめらむ女には、心おかせ給へ、云々」といっているように、品定は源氏に女のことを訓える意味も含めて、話されているためである。興味本位の話のようではあるが、主役の左馬頭にこのような意図があるので、品定には意外に思われるほど、まじめで教訓的な面がある。宗祇の帚木別註(四)などはこの点に注目して、その意味を強調している。(五)この考えはその後も続いており、江戸時代には若い女に読ませるべきものとも考えられた。要するに、品定には女の種々相の観察と、その批評(教訓)とがあり、前者は面白くて、源氏の恋愛遊戯の手引きの役をし、後者は女のあり方を訓えるものとして、後世この品定を尊重されることもなった。

品定では左馬頭が中心となって話し、頭中将と藤式部烝とが傍から加わり、源氏が聞き役である。上中下の階級のことから、中の品の女の話に入る。中の品は家庭・家風にもいろいろな違いがあり、そこでかしずかれて育つ女にも、それぞれ特色がみえて興味が深いという。階級の話から、(1)上流から転落した家の女、(2)下から成上った家の女のことに触れてから、(3)男に長く保たれる女、(4)たおやかなさまをする女、(5)家事むきのことに専念する女、(6)あどけなく児めかしい女、(7)そばそばしい女、(8)内攻性の女、(9)けしきばみ背く女、(10)浮気をする女などのことを、長短さまざまに説いて、それぞれに適切・鋭利な批評を加えている。次に木工・絵画・書道の例を引いて、女の根本的なあり方の評論をして、三人の経験談に入る。左馬頭は(11)誠実ではあるが、嫉妬の烈しい指喰の女の話、(12)花やかであって、浮気する木枯の女の話、頭中将は(13)可愛いくて気が弱い撫子の女の話、藤式部烝は(14)賢くてこわごわしい博士の女の話をし、それぞれに感想批評を加える。最後に物のあわれを知っても、これを表わすには節度が必要であることを説いて終る。

品定では多くの女性の容態・心情を描くと共に、恋愛の対象として、また家庭女性としての立場から批評するが、容姿のことはあまり強く触れていない。容姿の美しいのが望ましいことは、殊更いうまでもないからであろう。この後の物語でも、女の容姿の美しさは、強く願い求められており、その善美をしばしば讃歎し、憧憬している。恋愛の対象としては、美しくて、気立がよくて、風流を解し、芸能の才のあることなどが求められ、家庭人としては、ものまめやかで、よく夫の世話をし、家事処理の能力のあることが求められている。両者は「あだごとにも、まめごとにも、云々」「はかなきあだごとをも、誠の大事をも、云々」というように、対立的に考えられ、その一方に偏して、他方が欠けてはならないとする。物まめやかでも「美相なき家刀自」はよくないとされると共に、風流のあわれを知りすぐして、物まめやかさを欠く女は、それにもましてきびしく排斥される。

あだごと・まめごとの根本には、女の心の問題がある。女として根本的に要請されることは、物まめやかで、重りかな心を持つことである。左馬頭が「今はただ品にもよらじ。かたちをば更にもいはじ。いと口惜しく、ねぢけがましき覚えだになくば、ただ偏へに物まめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには、思ひおくべかりける。あまりの故由(ゆえよし)、心ばへ、打添へたらむをば、喜びに思ひ、少し後れたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。うしろ安く、のどけき所だに強くば、うはべのなさけは、おのづからもてつけつべきわざをや」というのは、このことであり、これが品定の女性評論の根本精神である。また木工・絵画・書道の例を引いても、花やかで才走っているものよりも、穏健・着実なものがよいとし、「はかなきことだにかくこそ侍れ。まして、人の心の時に当りて、気色ばめらむ見る目のなさけをば、え頼むまじく思う給へ侍る」というのも、当世風の花やかさよりは、心静かな着実さをよいとするものである。但し女の花やかさ・なまめかしさなどを、一概に悪いとするのではない。それは好ましいことであるが、そのような女が、ややもすれば物まめやかさを欠くのがよくないのである。左馬頭は木枯の女の話をした後で、靡きやすい女の「

艶にあえかなる好き好きしさ」を面白く思うだろうが、そのような女は浮気なものだから、気をつけねばならないという。「あだごと」「まめごと」よりも、より根本的なものとして「物まめやかに静かなる心のおもむき」が、強く要請される。それは前二者よりはるかに重く、これが女のあり方に対する根本義ともなっている。源氏をめぐる女の中、藤壺・葵上・紫上・明石上などのような重要な女は、この「物まめやかに静かなる心のおもむき」の人である。朝顔・花散里・末摘花・空蟬にもそれがある。六条御息所・夕顔・朧月夜・女三宮・浮舟などは、この根本義から外れる所があり、それだけそれが女としての欠点となっている。但しこの根本義がすべてでないことは、葵上・末摘花などをみても知られる。

品定で取り上げられた身分・容姿・あだごと・まめごと・心のおもむきなどは、すべて当時の男としての関心の深いことである。これは一夜の話であるから、問題に広く、浅く、観念的に、触れたにすぎないが、この後の物語で、具体的に、個性的に精しく深く描く。例えば、葵上・紫上・明石上などは、身分境遇が違い、また個性が違いながら、それぞれに「物まめやかに静かなる心のおもむき」の根本義を描き出している。根本義顕現の様相は各人各様であるが、そのことによって、根本義がそれぞれの文芸的形象の中で、個性的に発展・深化されている。このことは身分・容姿・あだごと・まめごとにおいても同様である。前に述べた女性観三種の中、品定のそれは主として、第一と第二とに当り、それも広く、浅く、抽象的に、触れたにすぎない。この後の物語で、第一の愛情の問題も、具象的に深化され、さらに第三の女の生きて行く道も、深く考えられている。それは品定で若者達が語ったような、単純なものではない。

三

女として最も関心の深いことは、男との愛情問題である。男との間がうまく行っている時は、問題でないが、その仲がうまく行かぬ時は、自己存在の根本をおびやかすので、その思いは極めて深刻である。男には生活力があり、かつ一夫多妻が認められていることでもあり、女との不仲はそれほど重大事でもないが、女にとっては、生きて行く上の大問題である。品定でもこれが女にとって重大事であることには、気がついているが、それも若い男の抽象的・観念的な理解であって、この後の物語で描かれている女性自身の思いとは、深密さも、切実さも違い、迫真力が全く違う。

女の立場から男との愛情の問題を整理すると、㈠男に他の女がある場合、㈡妻のある男と密通した場合、㈢男の愛情に信頼が持てない場合とすることができる。㈠は当時のありふれたことであり、品定でも取扱っている。(9)けしきばみ背く女の例や、適当に嫉妬するのがよいということなども、この問題に関する。また(11)指喰の女の例もこれが主で、やや具体的である。この女がついに死んだということは、この問題が女にとって、極めて深刻であることを物語っている。左馬頭もこの女を悼んでいるが、その反省は「たはぶれにくくなむ覚え侍りし」の程度であって、女の死ぬほどの思いを、本当に理解し、同情しているものとはいえない。指喰の女よりは六条御息所の物語が、その心情を描いてはるかに精しく、かつ深刻強烈で

ある。女三宮降嫁後の紫上の思いも、内攻的であり、思念的である。六条御息所は一途になまなましい愛欲の一念に燃えるが、紫上は苦悩の中にも無常を思い、わが身をはかなんで、出家を願う。二人とも強く思い悩むが、その心情はよほど違う。また葵上も源氏の浮気を不快として、気色ばむこともあるが、重りかな女であり、かつ正妻の立場にもあるので、はしたないさまなどはしない。明石上はその始はかなり心を乱して悩むが、次第に自制し諦観して、我子中宮の後見に生甲斐を感ずるようになる。末摘花・花散里はわが身の程を思って、自制謙抑している。最も理想的な女とされる紫上は、女三宮降嫁までは適当に嫉妬して、源氏にわずらわしがられもするが、大体において程よい程度である。これに反して、玉鬘にうつつをぬかした時の髭黒の北の方、夕霧が落葉宮を強く恋慕した時の雲井雁などには、はしたない振舞がみられる。

男の愛情に対する不満が、恨みとなり、歎きとなり、嫉妬となるのは、女が男に愛情を持つ限り、免れがたいことである。この物語では、女の個性・地位・境遇・当面した問題の性質などによって、その思いの内容も、その心情の動きも、さまざまに描かれている。それは源氏周辺の女だけのことではなく、夕霧と雲井雁、髭黒と北の方、匂宮と中君などの間にもみられるが、すべての女の不満・苦痛・怨恨・嫉妬の思いは、男の浮気から、即ちその女に対する愛情の専一でないことから起る。男にとっては、愛情の分散であっても、女にとっては、男の愛情の退潮であり、消滅にもつながるものとして、堪えがたい苦しみとなる。この問題については、男は強く、女は弱い立場にある。女は男の浮気によって悩まされ、苦しめられる被害者であり、女は不利不当な立場におかれている。この不当は密通の場合においてもみられる。

密通の場合、その責任の大部分は男にあるが、その結果としての罪は、女の方が重く負わされている。密通では源氏と藤壺、柏木と女三宮、匂宮と浮舟の事件が重大であり、源氏と朧月夜、源氏と空蟬とのことは大したことではない。密通はいつでも男が主動的である。女は受動的であるだけでなく、殆ど不可抗力のような事情がある。それにもかかわらず、女の方が重い責任を負わされている。源氏は父帝の后、継母藤壺と密通して、冷泉院を生ませた。この密通の責を事に触れては思うが、特に女三宮に柏木が密通して薫が生れた時は、順現業を思って罪を恐れている。この苦痛で罪が贖められたと思うが、そのためか、幻の巻で出家の心の準備をした時には、紫上の死による人生無常の思いが強くて、密通の罪を消すことなどは、全く念頭にない。密通の罪のことは忘れても、出家成道を思わす書きざまである。罪の意識の浅いことは、これだけでなく、秘密の子冷泉院が帝位に即いたことを喜び、その後見をして御代の安泰を図る。この秘密を冷泉院が知ったので、準太上天皇の殊遇まで受けることとなる。密通は源氏を責めても、さまで強いものではなく、却ってそのことが栄華顕貴を極める原因となり、源氏はそれを喜んでいる。(七) 宣長はこの密通を源氏に栄えをきわめさすために書いたのだという。この密通で源氏は責められることが少く、得る所が多いといわねばならない。

藤壺は思慮深く、つねに源氏を避けようとしている。桐壺院の死後も執拗に迫るので、秘密の漏れることを恐れて、ついに出家して

源氏を避ける。そしてよく行い勤めるが、冷泉院のことが気になり、死後は救われない魂となって、さ迷うこととなった。密通には受動的であり、その後も思慮深く、源氏を避けることに努めた藤壷が、秘密の子のために現世では出家し、後世でも罪を問われ、積極的な源氏は、秘密の子のために現世では顕貴を極め、後世でも罪を咎められるさまには描いてない。密通の罪の責任の追求は、男と女とによって、明らかに不公平である。

柏木と女三宮との場合は、密通そのものというよりも、権勢並ぶものなき宮廷の王者、源氏の権威を犯したことの罪の意識が強い。密通については、柏木は「さして重き罪には当るべきならねど」（若菜下）とも、「深き過ちもなきに」（柏木）とも思っている。源氏の権威を犯したため、宮廷の交りもできなくなったと思う悲しさから、死を願ってついに病死する。女三宮も源氏を恐れることが甚だしく、若い身空でついに出家する。この二人は人間的に未熟なところもあり、源氏の権威に打ちひしがれて、密通の責を重く負わされたのである。その問責は源氏と藤壷の場合より酷であり、男も女も同じように強く責められている。

匂宮と浮舟の結びつきは、浮舟にとっては不可抗力であったが、その後匂宮に心を寄せることもあった。密通を薫に知られて、浮舟は身のおき所もない思いがして、投身自殺を図る。助けられては、しばしば強く出家を望み、その目的を達しては喜び、全く世の中から忘れられて、朽木などのようにすごしたいと思う。薫に知られて、弟の小君がその文を持って訪ねても、冷たい態度であり、再びこの世に帰ろうとは思わない。全くの世捨人となって生きる心であるが、匂宮に至っては、全然責任感がない。浮舟が死んだものと思った時は、一時歎き悲しむが、それだけであって、密通に対する罪の意識は微塵もない。柏木だけは、密通の責任をとったことになるが、受身であった女三宮にも、厳しく責任がとらされている。他の二例では、源氏よりは藤壷が重く、匂宮には責任が問われず、浮舟だけが重く責任を負わされている。特に匂宮と浮舟との場合は、不公正極まるものである。

以上浮気をする男への不満と、密通の場合の咎とを検討したが、両者の場合とも、女は弱くて、悲しいものである。これが当時のまたこの物語の女のあり方であるとすれば、賢い女はこのことを洞察して、これに対処する方途も考えるようになる。密通は異常事態であるから別としても、男の浮気は当時日常的であったから、このため苦しい思いをしたり、見捨てられて人笑えになるよりは、むしろ男に従わない方がよいとする考えもあった。その代表者として、正篇に朝顔があり、宇治十帖に大君がある。朝顔は源氏の求愛を拒み、大君は薫の求婚を拒んで、二人とも男に靡かなかった。

朝顔は源氏の父桐壷帝の弟、式部卿宮の女で、源氏とは従兄弟の仲である。身分は源氏と結ばれるにふさわしく、源氏はその人柄をゆかしがって、しばしば文を送っていいよる。父宮は源氏に従うことを望むが、本人は承諾しない。既にれっきとした正妻葵上があり、外に通い所も多く、特に六条御息所が源氏の薄情を深く歎いて、物の怪となったと聞いてからは、「いかで人に似じと深うおぼせば、はかなきさまなりし御返などもおさおさなし」（葵）という。源氏からは文通が絶えずあり、朝顔も源氏の美しさと、その好意と

に心が動くこともあるが、文を通わすだけであって、打解けようとはしない。その後賀茂の斎院になって、しばらく源氏から遠ざかるが、退いてからまた源氏が近づく。この時同居していた叔母の女五宮や女房達も、しきりに源氏に従うようにすすめるが、ついに肯じないで、晩年に出家する。要するに、源氏は浮気者だから、その愛情は当てにならない。靡いた後で、六条御息所のように冷たくされ、人笑えになるようなことはしたくないと思って、従わないのである。

大君も薫の求婚を拒否するが、事情も意味もよほど違う。朝顔は源氏から独立しているが、大君は薫の庇護をうけて、何かと世話になっている。特に病気となって後は、身辺につき添って看護までしてくれる。また薫は源氏と違ってまめ人で、決して浮気者ではない。父八宮も生前薫の人物を頼もしく思って、大君と結ばれてもよいと思い、大君もそれは知っている。特に病気が重くなってからは、薫を拒み得ないような事情になったことも認めているが、それでも靡く気にはなれず、むしろ死を願ってついに亡くなる。大君が薫に靡かないのは、薫その人というよりは、一般的に男心に信頼がおけないためである。妹の中君が匂宮の薄情を歎いていることを目の前でみては、どうしても結婚する気にはなれない。仮りに当座は薫との仲がうまく行くとしても、長い間には冷たくもなって、苦しみ悩む身となるだろうと思って拒む。朝顔は源氏が浮気者だから靡かないが、大君は薫が極めて誠実なまめ人であると知りながら靡かない。薫個人はたぐいまれなまめ人であっても、男である限り、多情という本質を持っているから、薫も拒まねばならなくなる。朝顔の立場では、男が浮気者でなければ、拒まなくてよいが、大君は男という男のすべてを拒まねばならない。等しく男を拒んでも、その意味は大君の方がはるかに深刻であり、人間否定にまで進んでいる。

品定の女のすべては、またその後の物語の女も、男との愛情の生活を当然としている。朝顔と大君とは、その中に痛苦の多いことを慮って、それを拒否する。それは数少い事例であるから、異常な思いの表現とみねばならない。異常ではあるが、当時の女が男の多情に悩み苦しんで、それに対処する道を求めて、このような非常手段までも考えたのである。男の多情に対する生活の智恵というと、安っぽくなるが、確かにそのような意味がある。しかもそれは或意味で、自己否定による男性否定であって、捨身のわざである。従って常人の行い得る道ではない。男に対する女の立場の不当・不公正は、ついにこのような深刻無残な思いまでも、培ったのである。

四

当時の社会、従って物語の社会では、女には全然生活能力がなく、男に依存して生きて行く外なかった。このため一夫多妻の風習も生じたのであろう。また男女関係の極めて緩やかな風習があって、男は気に入らなくなれば、自由に女を捨てることもできた。これらのことが、今までみて来たように女性の立場を不利不当なものとしたのであろう。物語ではこのような不利不当な立場を、仏教の宿世思想で解釈している。この不合理が現実の世のこととしては、理解できないので、前世の因縁によるもの、即ち女は宿世が拙いものとして、理解しようとしたのである。男に依存せねばならない女の身

の不安定さを、「女の宿世はいと浮びたるなむ、あはれに侍る」（帚木）とも、「女は心より外にあはあはしく、人におとしめらるる宿世あるなむ、口惜しく悲しき」（若菜上）とも、「女はいと宿世定めがたく、おはしますものなれば、よろづに歎かしく」（仝上）ともいう。女の宿世が不安定であることは、「あはれ」であり、「口惜しく悲しき」ことであり、「歎かし」いことである。夫に死別すれば、「心憂き宿世」（関屋）「憂き宿世ある身」（仝上）とも、「中空に憂き御宿世」（夕霧）とも観ぜられた。女に死別した男には、このような宿世観はない。また男に冷たくされ、捨てられることも、宿世が拙いのである。六条御息所も源氏に冷たくされて、生霊となって葵上を悩まし、それが世の噂となったことを、「宿世の憂きこと」（葵）と辛く思い、髭黒が玉鬘にうつつをぬかしては、その北の方が「心憂き宿世」（真木柱）といって泣く。また密通によって懐胎する場合などにも、宿世が憂く、辛く思われた。藤壺は「浅ましき御宿世のほど心憂し」（若紫）と思い、女三宮は「契り心憂き御身なりけり」（若菜下）と思って泣く。その他、気に入らぬ髭黒の妻となった玉鬘は「思はずに憂き宿世」と思い、柏木の死後夕霧に言い寄られた落葉宮のことを、母親は「宿世憂く」（夕霧）思う。要するに、女の身の上が不安定であること、男に冷たくされること、密通して懐胎すること、気の進まない男と結ばれることなどが、すべて女の憂き宿世のせいである。「宿世」の拙さを表わす場合、「憂し」が十二回用いられているが、そのすべてが女に対して使われている。このことも物語の女が、憂き宿世を負い持っていることを表わすものである。

憂き宿世を持つ女は、同時に罪が深いのである。源氏は死霊となった六条御息所のことから「女の身は皆、同じく罪深きもとゐぞかし」（若菜下）と思い、一条御息所の加持の律師は、落葉宮が夕霧に通じていると思って「女の悪しき身をうけ、長夜の闇に迷うもただかやうの罪によりなむ」（夕霧）と宮を非難し、八宮は女を「罪の深きにやあらむ」（椎本）といい、匂宮の従者時方は「女こそ罪深うおはするものにはあなれ」（浮舟）という。この女が罪が深く、悪しき身であるとするのも、宿世観の一つの内容とみてよい。女の宿世には憂く、辛く、悲しく、口惜しいとする詠歎的・感傷的な思いと共に、罪業が深いとする思いまで寄せられて、女の苦悩の多い現実を理解しようとしている。

宿世は仏教思想であるが、日本の文芸を歴史的にみても、宿世がこのように強く採り用いられるものはない。上代の万葉集をみても中世の平家物語・徒然草などをみても、無常観は強く採られているが、宿世思想は強くない。この物語でこれがこのように力強く採られたのは、この物語の世界の人々、特に女性の立場の説明に、この思想が生きてはたらく力を持ったためである。女性の立場の不合理なことは、宿世思想でももってこなければ、到底解釈できない。宿世思想は女が身の不幸を歎き悲しむ思いに、一種の諦らめと慰さめとを与えるものである。但し宿世には、明石一族にみるような、めでたく喜ばしいものもあるが、女に対する一般的な宿世観は、宿世を拙いものとするのである。

物語では女が著しくその身を不幸なものとするが、歴史的にみて平安時代の女性の立場が、特に不当不利であったとも思えない。…

代は別として、上代・中世・近世を通じて、平安女性よりも、女の立場が有利であったともいえまい。むしろ平安女性の方が、重んぜられていたともいえる。それにもかかわらず、何故この物語で、特に女性の立場の不当不利を、強く思ったのであろうか。思うに、女性が強く不満を感じたのは、時代文化の中における女性の地位に、目覚めたためであろう。平安女性は時代文化の学問・教養・才芸を身につける点では、決して男に劣るものではない。特に勝れた女は凡常の男に勝るものがあった。このことはこの時代の女流の和歌・物語・日記・随筆などの作品に、勝れたものの多いことでも知られる。枕草子にもよく出ているが、またこの物語からも知ることができる。藤壺や紫上の思慮とやさしさ、葵上のおもりかさ、空蟬の節操、明石上や玉鬘の健全な思想心情、朝顔や大君の深い思念、女三宮や浮舟の堅い道心などをみても、男のよくしないものがあるであろう。特に心のこまやかさ・やさしさなどは、到底男の及ぶ所ではない。もし物語の女性全般と男性全般とを、一個の人としての思惟・心情とか、更には物のあわれの文化に参与する意味とかで、対比させるならば、女は男に勝るとも劣らぬものがあるであろう。この女性の優位は、紫式部の女性観の現われであり、この時代の文芸、更にこの物語にみる特異な現象である。これは時代文化が優にやさしい女性的な物のあわれの文化であったため、特に女がその文化の担い手として、大いに意義を持ち得たことを反映するものであろう。時代文化の中における女の立場が、高いにもかかわらず、現実の社会生活において、また恋愛生活において、女が著しく不利な立場にあることが、自己の能力に目覚めた女には、理解しがたく、その不合理を解釈するために、宿世思想を採ったのであろう。このため女の宿世観が他の時代よりも多く、かつ生きてはたらいたのである。但し宿世観はこの外、多くの現実解釈のために、盛んに用いられているが、女の不当な立場を解釈するためにも、これが必要であったのである。

女の立場の不当不利を宿世で理解するならば、それは如何ともしがたいこととなり、苦しみ歎く心を、これで諦め慰める外ない。しかしこの物語では、女の立場の不利不当を自覚しながらも、それを乗り越えて生きる道についても考えている。前の男を拒否することも、その一つの生き方であるが、それはあまりにも非常手段である。物語で「女ばかり、身をもてなすさまも所せう、あはれなるべきものはなし。物のあはれをも、をかしきことをも、見知らぬさまに引入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはえばえしさも、常なき世のつれづれをも、慰むべきぞは」（夕霧）というのは、女の窮屈な立場に対して、反撥する思いである。物のあわれやおかしさに対しても、見知らぬさまに、引入り沈んだりなどしたくないということは、女の自覚であり、この思いのはけ口として、当時の女には創作活動があった。物語は「よきもあしきも、世に経る人の有様の、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも云ひ伝へさせまほしき節々を、心にこめがたくて、いひおき始めたる」（螢）ものである。これは物語を作る動機、即ち創作衝動をいうものであるが、高い教養や鋭利な心をもって、社会のいろいろなことがらを見聞すると、興味も起り、かつさまざまな感想も起り、心にこめておきにくくなる。生活の上では、閉鎖的であることを余

儀なくされた女性の鬱屈した思いも、創作で発表することによって慰められ、気持も晴らされる。女が時代文化の波濤の中で、高い立場にありながら、生活の上で鬱屈を余儀なくされたことが、その心情のはけ口を、創作に求めさすこととともなる。蜻蛉日記にも、枕草子にも、この物語にも、その創作衝動の根底に、如上の意味が汲めると思う。但し日記・随筆・物語などは小数の勝れた女性だけに与えられた創作の道であるが、和歌だけでは広く女性に門戸を開いていた。

品定の女性観は広くはあるが、常識的なものであって、深くはない。ただ「物まめやかに静かなる心のおもむき」をよいとする点は、物語を貫通する女のあり方の根本義とはいえる。しかしこのような根本義を体しても、女なるが故の不利不当を免れることはできない。それで女性観としての深いものは、(1)男に比べての女の立場の特質を深く追求すること、(2)その不利不当に対する理由を追求すること、(3)その不利不当に対処する道を考えることなどである。(1)は愛情の問題、密通の問題で、現実の体験において追求し(2)は宿世観で理解し、(3)は男性拒否や文芸創作において考えている。当時の女が文化的には高い水準にありながら、女なるが故に、不利不当に鬱屈を余儀なくされたことが、文芸創作の恰好な母胎となり、そのため傑作源氏物語も生れたことは、皮肉な幸といわねばならない。

註（一）藤岡作太郎著・国文学全史平安朝編五〇一頁・五〇五頁

（二）源氏物語玉のをぐし・第三巻・橋姫巻

（三）賀茂真淵は源氏物語新釈で「此物語の始終のやう、かの品さだめにこもれり」といい、国文学全史では、紫式部は人物の行動、草紙地の文、人物の対話などで「自己の婦人観を発表せり。雨夜の品定が源氏一篇の総評といふべきは論なし」という。また源氏物語事典（岡一男著）でも「この物語における作者の女性観は、雨夜の品定（帚木）に総収されている」という。

（四）帚木別註で宗祇はしばしば「人の心のをしへにいへる也」「皆これ男女のをしへにいへる也」「これ又人のをしへ成べし」などという。また男女のことだけでなく「君臣朋友の中にも大切のことば也」とか、源氏や頭中将は政治を執るべき人だから「女の上にて、世間の人の心ををしへたてまつる物也」などと、男女間のことだけでなく、朋友や政治の道にまで拡大して、教訓性を強調している。

（五）加藤宇万伎の「雨夜物語だみことば」は、この趣意で書かれたものである。

（六）「怨ずべき事をば、見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも、憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。云々。つながぬ舟の浮きたるためしも、げにあやなし」は、これをいう。

（七）源氏物語玉のをぐし・第二巻で「冷泉院のもののまぎれは、源氏の君の栄えをきはめむために書る也」として、そのことを精しく説いている。